マリ＝ド・フランスの譚詩「序詞」と「ギジュマル」

福　井　秀　加

〔序　詞〕

全能の神から知恵をさずけられ，雄弁の術を与えられた者は，そのことを隠したり黙っていたりしてはならず，喜んでそとに示さねばなりますまい。大いなる善は多くの人の耳にはいりますと，初めて花をつけ，多くの人にほめそやされますと花を開くものでございます。

昔の人のならわしであり，プリスキアヌスの言葉にもありますように，古人はいにしえに作られた書物のなかでかなり解りにくくものを申しました。それはやがてこの世に来たるべき人たちのため，そしてその書物を学ぶべき人たちのため，後の世の者たちがその文字の注釈をし，文字通りの意味より多くのことを更につけ加えることができるためでした。智者はみずから心得知っておりますように，時を経るにつれて，知恵は冴え，以前は見逃したかもしれぬことを見逃さぬようになります。ですから，悪徳を避けようとのぞむ者は，学ぼうとつとめ，理解しようとつとめて，難しい仕事を始めなければなりません。そうすれば大きな苦しみからは一層遠ざかり解き放たれるというものです。そのために，何か良い話を作り，ラテン語を俗語に書き改めようと思い立ちましたものの，それではあまり益のあろうはずはなく，あれほど多くの他のかたも手がけておられます。そこでむかし，私の聞いたことのある譚詩に思い至りました。疑いもなく，よく存じていたことですが，初めて譚詩を作り，それを世にひろめた人たちは，耳にした出来事を覚えておくために譚詩に作ったのです。私はそれらの多くが語られるのを耳にいたしました。聞き捨てにしたり，忘れ去ったりするのは本意ではございません。韻にしくみ，詩文にいたしまして，いくたびか夜を明かしたのでございます。

高貴なる王よ，あなたの栄光のために，武勇の誉れ高く，雅びであらせられ，あらゆる喜びを一身に集められ，あらゆる善がそのお心に根ざしているお方のために，譚詞を集め韻文に作り語りまして捧げまいらせんものと心に定め，望んでおります。嘉し給いますならばこれに勝る喜びはなく，いつの日までも光栄に存じ奉ります。この捧げものを敢えて奉りましようとも，思い上りとは思し召し下さいますな。さて始まりを御聞き遊ばしませ。

〔ギジュマル〕

良い話の種をとり扱う者にとりまして，その話の出来映えがよくなければ，たいそう辛いものでございます。殿方様，マリーの語るものを御聞き下さいませ。マリーは決して自らの務を怠りませぬ。人は自分を良くいわせている者をほめそやします。ある国に男女を問わず，大そう評判を得た方が現われますと[8]，それを羨む人たちはしばしば悪口を言い，その値打を損おうとするものでございます。そのため，裏切って人に噛みつく卑怯な性悪犬のするような事を人は始めます。嘲笑うものや中傷好きが私の作をけなそうとも，私は

なおざりな仕事をいたしますまい。悪しざまに言いますのはあの人たちの持前でありますもの。

その昔ブルターニュの土地の人が譚詩に作り，私がまことのことと知っております物語を皆様にごく手短かに御聞かせいたしましょう。始めの話の冒頭では，文字と書物に従って，むかし小ブルターニュに起った出来ごとを御披露申し上げようと存じます。

その頃，ホイラス王が時には平和に，時には戦をしながらこの地を治めておられました。この王に一人の君寵めでたい家臣がありました。レオンの領主で名をオリディアルと申されます。立派で勇敢なこの騎士殿には奥方との間に二人の御子がございました。一人は男子，いま一人は美しい女子，姫はノガン，若君はギジュマルと呼ばれました。この国で並ぶものなく美しいギジュマルは，母君の寵児，父君にもよい御子息でした。ギジュマルが一人立ち出来るようになりますと，領主は子息を王のもとに伺候させようと送られたものです。御小姓になったギジュマルは，知恵もすぐれ，りっぱな若者で，すっかりみなさま方のお気に入りでありました。やがて時が来て，年頃になり，知力も相応しく具わりますと，王はギジュマルのために華麗な騎士叙任式をあげられました。王はギジュマルに望むにまかせて物の具などを与えられたのです。ギジュマルは王の宮廷を辞しました。出立に際して，ギジュマルは多くの贈物をいたしました。そして千才と合戦の絶える間のないフランドルへ誉れを求めてやってまいります。ロレーヌにもブルターニュにもアンジューにもまたガスコーニュにも，そのころ，この若者に比類するような優れた騎士は，みられなかったものでした。しかし，自然は誤りをおかしました。ギジュマルはどの様な愛も心にとめません。天の下ひろく，奥方にせよ，姫にせよ，いかに高貴に美しくありましょうとも，ギジュマルに愛を求められればすすんでその愛を拒まれる御方はなかったでありましょうものを。あまたの度重なる求愛にもギジュマルは心を動かされることなく，ギジュマルが人に恋をしたいと思っている，などというそぶりに気付くお方は一人として誰もございませんでした。ですから，この若者を知る者も知らぬ者も，ギジュマルを気の毒なお人だと思っておりました。

ギジュマルは名声の花の盛りに(70)，待ちわびる父君，王君，優しい母君，姉君に逢おうと故郷へ帰ってまいりました。思いますに，ひと月はたっぷり，皆と共に過されましたろう。ある日ギジュマルは狩に行こうと思い立ち，その夜に家来衆，狩人，勢子たちを集めました。この楽しみがことさら好きな方でしたから，朝まだきに森にはいり，大鹿を求めて森を進み，犬を放ちました。追手は先を走ります。若殿は馬をゆっくりと歩ませ，従者は殿の弓，剣，犬を携えてはべっております。ギジュマルはその狩場を移る前に，よい折があれば，獲物を射たいものだと思いました。と，深い茂みの中に子鹿を連れた雌鹿が見えました。真白なけもので，その頭には雄鹿の角が生えております。犬の吠えたてる声に追われて出て来たのです。ギジュマルは弓を取り，このけものを狙って矢を放ちますと，その矢は鹿の前額を射抜き，鹿はたちまち倒れました。が，不思議なことにその矢は，はね返って，ギジュマルの腿を貫き，馬の脇腹につき通ったのです。やにわに若者は馬から落ちて，矢を受けたその鹿のそば，草地の茂みにあおむけに倒れました。雌鹿は苦しみあえぎながら，このように話したのです。「あわれ，私は死にゆく身か。私を傷つけたこの若者にも運命のかくあらんことを。治るみこみのないように。薬草であれ，薬根であれ，医者であれ，はた媚薬であれ，腿に受けたその傷の苦しみを癒すものはない。およそ女人

の耐えられぬほどの苦しみを汝の愛のために耐えしのぶ者が現われ，その傷をいやさぬ限り治癒の薬はないのだよ。汝もまた女のためにいたく苦しむことになるだろう。このなりゆきには恋する人びと，恋したる人びと，やがて，恋すべき人びとも，皆ことごとく仰天しよう。さあ立ち去れ，私にかまうな。」

ギジュマルはひどい手負いでありましたが，耳にしたことを大層狼狽して，考え始めました。我が身の傷を癒すために，はたして何処へ行こうかと。生命を落したくはなかったからです。ギジュマルはよく承知しておりました，また明らかに口にしたこともありましたが，自分が恋し，また苦しみを癒してくれるほどの如何なる女性にもいままで逢ったことがなかったのです。従者を呼んでこう申しました。「拍車をかけて走り(134)，仲間を連れ戻すように。話したいことがある。」従者は早速馬に拍車をかけて去り，ギジュマルはとどまりました。苦痛のために呻き声をあげます。下着を引裂いてきつく傷口をしばりました。それから馬にまたがってその場を立去りました。一刻も早くそこから遠ざかろうと望んだのです。家臣の誰かがあるいはそこに来てさまたげをし，あるいは押しとどめることもあろうかと思いました。ギジュマルは森を通って馬を駆ります。緑の道をたどってゆくと，原に出ました，森の果てには崖と山が聳え立っていて，下を流れる川は海に注いで湾となり，舟つき場がありました。この所に一艘の舟が舫っています。その舟の帆にギジュマルは眼をやりました。舟は大そう結構な造りで，その内と外には瀝青が塗ってあり，何人もそこに継目をみつけることはできません。釘もかすがいもことごとく黒檀で出来ていないものはなく，これにまさる高価な御宝はこの世にないとみえました。舟の帆はすべて絹づくりであり，拡げてみるととても美しいものです。騎士はすっかり考え込んでしまいました。舟がその場所へ着くことができるなどと言われているのを，国中どこであれ，聞いたことがなかったからです。ギジュマルは近寄ってゆき，下へ降りました。そして舟に何とかしてよじ登りました。その中に舟を守っているはずの人が見付かるだろうと思いましたが，人の姿もなく誰も見えません。舟の中央には寝台がしつらえてあり，その台の足や枠木にはソロモンの作風をしのばせる金のはめこみがあり，全てが象嵌細工の，糸杉と白い象牙でできておりました。その上にある羽ぶとんは金の縫取りのある絹でした。その他の敷物については何とほめてよいのかわかりません。ただ枕についてだけでも申しましょう。誰でも頭をその上に置いた者は，決して白髪を頂かないといわれているものです。掛ぶとんはすっかり黒貂の毛皮で，アレキサンドリアの絹で包んでありました。純金の二つのカンテラ，悪い方でもお宝の値打ですが，この二つは舟の舳先に置かれ，それぞれに蠟燭が点っていました。ギジュマルはこれにはすっかり驚いてしまいました。寝台にもたれかかり，身体を休めました。傷が痛みます。ギジュマルはやがて起き上り，その場を離れようといたしました。が，もう戻ることはできません。舟はギジュマルを乗せてすでに沖へ出ており，順風，微風をうけて速く走っております。もう引き返せません。ギジュマルはすっかり悲しみ，どうしたらよいのかわかりませんでした。若者が途方に暮れたからといって，それは不思議ではございません。傷の痛みは激しく(198)，この出来事を甘んじて受けねばならなかったのです。ギジュマルは神に祈りました。どうかお守り下さって，御加護により港へお導き下さり，死からお救い下さいますようにと。それから寝台に横になり眠り込みました。その日にギジュマルは苦しみの峠を越したのです。夕暮がくる前に，その傷が癒やされることになる場所に着くでしょう。そこはある王国の中心である古い町の下にありました。

この城下を統治している領主は年老いた人ですが，この方には大そう身分の高い，高貴で雅びな，美しく賢明な奥方がありました。この領主は極度に嫉妬深うございました。つまりこの方の生れつきの性質が暗に示しているわけですが，誰しも妻を寝取られるのを大層に憎むものでございますから，すべての老人が嫉妬深いということは年のせいとして，致し方がございますまい。妻から片時も眼を離さなかったと言っても冗談ではありません。砦の下の果樹園の三方は石垣に取り囲まれておりました。その壁は緑の大理石でできており，大へん分厚く，高うございました。それには入口が一つしかなく，その入口は夜となく昼となく，見張られていました。残る一方は海でかこまれ，たとえその城館に用があっても，舟に乗って来なければ，誰も出入りできないようになっていました。領主は城壁の内に妻を安全にかくまっておくために，部屋をしつらえておりました。これほど美しい部屋はこの世にございません。入口に礼拝堂がございました。その部屋の周囲の壁に絵画があり，愛の女神ウェヌスがその絵の中に巧みに描かれておりました。その絵でウェヌスは，人々はどの様にして愛を保ち，忠実によく仕えるべきかその有様を示しておりました。各人がどのように自分の愛を抑えるか，を教えているオウィディウスの書をこのウェヌスは燃える火の中に投じており，いつの日かその書を読み，オウィディウスの教えに従うような人をすべて破門しているところが描いてありました。奥方はそこに閉じこめられ，かこわれていたのです。領主は一人の娘を奥方に与え，かしづかせていました。それは自分の姉妹の娘つまり姪に当る大そう高貴で育ちのよい娘でした。この二人は睦まじゅういたしました。領主が外に出た時は，帰ってくるまでこの娘は奥方の側におりました。男であれ女であれ，そこに来られないように，奥方が城壁から外へ出られないようにと。白髪の年とった司祭が入口の鍵を預っていました。その司祭は四肢の彼の部分を失っておりました。そうでなければ，信頼されなかったでしょう。この人は奥方のためにミサを唱え，食事に際しては給仕をいたしました。

ちょうどその日の昼前，奥方は果樹園に出かけました(262)。食事をしてから眠った後で，気晴らしにその娘を連れて一緒に外へ出たのです。二人は海辺を見下しますと，上げ潮にのってやって来る舟がみえました。それは舟つき場に向かって，帆を上げて進んでおりました。操っている人の姿は見えません。奥方は逃げ帰ろうといたしました。奥方がこわがったのも不思議ではございません，顔がすっかり赤くなっております。しかし賢明で，もっと気持の大胆な娘の方は，奥方を勇気づけ安心させました。二人は舟の方へ急いでまいりました。娘は外套を脱いで舟の中へ入りますと，舟は大そう美しゅうございました。そこには眠っている一人の騎士の他に，人の気配はありません。娘はその騎士が真青なのを見て，死んでいると思いました。側に立ち止ってつくづくと眺めますと，娘はもとの所へ引返し，急いで奥方を呼び，真実をすっかり話し，自分が見たその死人のことを大へん嘆き悲しみました。奥方は答えて申しました。「ではそこへ行きましょう。その方がもし死んでいるなら，埋めて上げましょう。あの司祭が私たちを助けてくれるでしょう。もし生きていらっしゃることがわかれば，その方は口をきいて下さいましょう。」奥方が先に立って娘が後に続き，二人はぐずぐずせずに行きました。奥方は舟に入りますと，寝台の前で立ち止まり，騎士をつくづくと眺め，その美しさに大そう哀れをおぼえ，その方のことを悲しみ，痛ましく思いました。この御若い身で何と御不幸なことでしょうと言い，彼の胸に手を当てますと，胸は暖かく，両脇で動悸を打っている心臓はまだ生きているのがわかりました。眠っていた騎士は眼をさまし，奥方を認めますと，大そう喜んで会釈をいた

します。自分が陸に辿り着いたのが，よくわかったからです。奥方は眼に涙をため，思いに沈んで，とても優しく会釈に答え，どの様にして，また，どの国からいらっしゃったのか，戦いのために国を逐われたのかどうかと尋ねました。「奥方様，」と騎士は答えました。「そうではございません。まことを申すことが思し召しに叶うのなら申しましょう。何もかくしだてはいたしません。私は小ブルターニュの者です。今日森に狩に行き，白い雌鹿を射ましたところ，矢がはね返って私の腿を傷つけました。その傷から癒されることは決してなかろうと思います。その雌鹿は歎きの言葉を口にし，私をひどく呪い，私はある女の手によるのでなければ決して癒されることはなかろうと，誓って申したのです。そのひとが何処におられるのかは分りません。この予言を聞きますと(326)，私は急いで森を出，とある舟つき場でこの舟を見ました。そしてそれに乗り込みました。何というおろかな事を致したのでしょう。舟は私を乗せてどんどんと沖へ出てしまいました。私は何処に着いたのか，この町は何という名なのか知らないのです。美しい奥方様，神かけて御願い申します。どうか私に御助言を賜わりとうございます。どちらの方へ行けばよいものかわからず，この舟を操ることもできないからでございます。」奥方は答えました。「美しい騎士様，喜んで助言を差し上げましょう。この町は私の夫のものでございます。あたりの国もさようでございます。夫は高い家柄の人でありますが，とても高齢で，こちらが苦しくなるほど嫉妬深いのでございます。誓って申し上げますが，私はあの壁の中にとじ込められておりまして，入口はただ一つしかございません。一人の年とった司祭が戸口を見張っております。あの司祭が業火に焼かれるとよろしいのに。私は其処へ夜も昼もとじ込められております。その司祭の許しがなければ，そこから外へ出ることはできませんし，夫の言い付けがなければ，そこから一歩でも出るような機会は私にはございません。此処には私の部屋と礼拝堂があり，私につき添っているこの娘がおります。貴方様が御歩きになれるまでとどまってもよいと御考えなら，私どもは喜んでお泊めし，心から看病させていただきましょう。」騎士はこの言葉を聞くと，静かに奥方に謝意をのべ，奥方のもとにとどまらせて頂きましょう，と言いました。寝台から身を起こし立ち上りますと，やっとの思いで騎士は二人の手にすがりました。奥方は自分の部屋へ騎士を案内します。娘の寝台は仕切りのかわりにその部屋にしつらえてあった天蓋幕のうしろにあり，若者はそのうえに寝かされました。二人は金の盥で水を運び，傷と腿とを洗い，白い麻の美しい布で身体中の血の跡をぬぐい，その傷をしっかりとゆわえました。騎士は手厚く看病を受けたのです。夕方の彼等の食事がまいりますと，娘はそれを沢山とっておきましたので，彼は十分に食事を摂りました。充分に食べ，そして飲んだのです。しかし愛の矢が騎士の心を射抜いてしまいました。きっと騎士の心は非常に苦しむことになるのでしょう，奥方が騎士の心を大そう傷つけたものですから。自分の国をすっかり忘れてしまいました。傷の痛みをまったく感じなくなり，大そう苦しい溜息ばかりをつきます。騎士の看病をする筈の娘にどうか眠らせておいて下さい，と，たのみます。彼女はその場を立ち去り，騎士を残しました。騎士が娘を引き下らせましたので，娘は奥方の前にまいりました。彼女はギジュマルが感じていた火によって，いささかほてりを感じていました(390)。ギジュマルの心には火がつき燃え上っていたのです。

騎士は再び一人になりますと，もの思いに沈み苦しみます。まだこれがどういうことなのかわかりませんでしたが，この奥方の手によって癒されなければ，死ぬのは火を見るより明らかだとはよくわかっておりました。彼は申します。「ああ，私はどうしたらよいの

だろう。奥方のもとへ行って，この不幸な途方に暮れたものを哀れんで下さるように言ったものだろうか。私の願いを拒むほど傲慢で気位の高いお方なら，私はこの不幸に果てしなくやつれてゆき，苦しみの余り死んでしまうことになるはずだ。」騎士は溜息をつきましたが，間もなく新たな思いが心に浮かびました。いたし方なければ，苦しむより仕方がないのだと思ったのです。一晩中一睡もせず，あえぎ苦しみました。頭に浮かぶのはあの言葉，あの顔付，あの輝くひとみ，あの美しい口許です。それは苦しみを騎士の心につき刺すのでした。低い声で御慈悲を，とつぶやき，今少しの所で奥方を恋人とよびかねない有様でした。奥方がどう思い，どんなに愛に苦しんでいるかを知ったなら，騎士はきっと喜んだことでございましょうに。わずかばかりの慰めの言葉によって，騎士の顔色を蒼ざめさせている苦しみはいささかでも少くなることでございましょうに。彼が奥方を愛する余り苦しんだとて，奥方はそのことで何も慰められはいたしません。夜のあける前に奥方は起き上り，一睡もしなかったのを歎かわしく思いました。奥方の心を痛めていたのは愛であったのです。奥方と共にいた娘は奥方の顔色を見て，傷を癒すために部屋に泊っている騎士を恋しているのだと見抜きました。しかし娘には騎士が奥方を恋しているのかどうかわかりません。奥方が礼拝堂に入りますと，娘は騎士のもとにゆきました。

娘は寝台の前に坐りました。騎士は娘を呼んで申します。「友よ，私の奥方は何処へいらっしゃったのですか。なぜこんなに早く起きられたのです。」そこで彼は口をつぐみ，溜息をつきました。娘が騎士に話しかけて言いました。「騎士様，貴方は人を恋していらっしゃいます。余り心をお隠しにならないようなさいませ。貴方の恋が十分うけ入れられるように，恋をなさることが御出来ですもの。あの奥方様に恋しようなどと思し召す殿方様ならば，思いこがれるのも，もっともと存じます。お二人が心変りなさらなければ，この恋はふさわしいものになりましょう。貴方は美しくいらっしゃり，奥方様も美しうございますから。」騎士は娘にこう答えました(454)。「私の心はその様な恋に燃えているのです。もし救いと助けが得られなければ，私はとてもひどい目に逢うでしょう。優しい友よ，良い考えを聞かせて下さい。この恋をどうすればよいのでしょう。」娘は心から親切に騎士を力づけ，助力を約束し，出来る限り御ためになるよういたしましょう，と慰めました。とてもみやびやかでしつけのよい娘でございます。

奥方はミサを聞いて戻って来ましたが，忘れることが出来ません。あの方が何をなさっているのか，目醒めていらっしゃるのか，眠っていらっしゃるのか，奥方の心はあのお方への愛を思いとどまりはいたしません。娘は奥方をさし招き騎士の所へ導きました。よかれ悪しかれ，騎士が奥方にゆっくりと自分の心を打ち明けられますように。

さて騎士は奥方に挨拶をし，奥方は騎士に挨拶をします。二人は大層おびえておりました。騎士は奥方に何も求めようとはしませんでした。彼は他国者でしたから，心のたけを打ち明けたなら，奥方に嫌われ，遠ざけられるかと恐れておりました。しかし自分の病を見せない人が，健やかになれないのはほぼ確かです。恋とは心の中の傷であり，外には何も現われません。恋は人のさがから来るものですから，長く続く病でございます。世間に楽しみを求め，自らの行いを鼻にかけるような卑しい雅ぶる者たちのように，この病いを軽々しくあつかうものも多いのですが，それは恋ではございませず，狂気であり，悪業であり，情慾であります。忠実な殿方を一人でも見付けられれば，その方に仕え，その方を恋し，その方の言い付けに従うべきと存じます。ギジュマルは熱列に恋をしておりまし

た。いち早く助けが得られるか，又は，彼の人生は苦しまねばならぬかでありましょう。ギジュマルは恋から勇気を得て，奥方に思いを告げました。「奥方様，貴女様ゆえに私は死にます。貴女様ゆえに私の心は大そう苦しんでおります。私を癒して下さらないのなら，私はつまり死ぬことになるのです。私は貴女に愛を求めます。美しい御方よ，私を拒まないで下さい。」奥方はこの言葉を十分に聞くと，優雅に答えて笑いながらこう言ったのです。「友よ，貴方様にその願いを叶えて差し上げよ，というお勧めはあまりにも性急なものでございましょう。私はそのようなことになれてはおりません。」騎士は言いました。「奥方様，どうか御許しを。こう申しましたとて，お気を悪くなさいますな。玄人の浮気な女などは，愛して貰うために長い間じらせるのです。その楽しみを承知していると思わせないために(518)。しかし良い御心の奥方はその身に価値もあり分別もありましょうから，思いに叶った殿御をみつけた時は，その殿御にあまり高慢な様子はみせず，その男に恋をし喜びを得ます。こうして二人は人に知られず，人の口にのぼることなく，良き事を充分に味わってしまうのですよ。美しい奥方，もうこの弁明は止めにいたしましょう」。奥方は騎士が真を言ったものと知り，すぐさま騎士の愛を叶えてあげ，騎士は奥方に接吻しました。その後ギジュマルはしあわせでした。二人は共に横たわり，話を交わし，屢々くちづけをし，抱き合ったのでございます。さらに，他の恋人たちがならわしとしていたことが，この両人にもふさわしくありますように。

思いますに一年と六ケ月，ギジュマルは奥方と共におりました。その日々はまことに甘美なものでありました。しかし己れの業を忘れぬ運命の女神は，いち早く車を廻わし，一方を下に他方を上に置くものです。二人についてもこの様なことが起りました。たちまち人目についてしまったのです。

夏のある朝のことでしたが，奥方はこの若者の側に横たわり，その口と顔に口づけをし，このように言いました。「やさしい恋人よ，貴方を失うことになる，と私の心が申します。私たちは人に知られて見付けられることでしょう。貴方が死ねば，私も死にとうございます。貴方はここから立ち去ることが御出来になれば，別の恋を再び手に入れることになりましょうが，私は苦しみの中にとどまるでしょう。」騎士は答えました。「奥方よ，その様なことは二度と言わないで下さい。他の奥方の庇護を受けても，嬉しくもなく，安らかでもありません。それについては，どんな心配もなさらないように。」「恋人よ，それでは私を安心させて下さいませ。貴方の下着を手渡して下さい。裾のところに結び目を作っておきます。その結び目を解き，裾を拡げることのできる女になら，どこであろうと，恋をなさってよろしゅうございます。」騎士は下着を手渡し，奥方を安心させました。奥方はこんな工合に結び目を作りました。鋏か短い刀でも使わぬ限り，どんな女もそれを解くことができないような結び目です。奥方はその下着を騎士に返し与えます。騎士はそれを受取りましたが，奥方についても自分が安心できるように，帯に同様のことをすることにいたしました。その帯は彼女が肌身にまいており，片脇の所で軽く締めていたものです。止め金をこわしもせず，切り離しもせずに，開くことのできる男とならば，恋をして下さい，と騎士は奥方に頼みました。騎士は奥方に接吻し，立ち去ろうとはいたしませんでした。

奥方の領主がつかわした狡猾な部屋仕えが，その日二人を見付け，秘事(ひめごと)は露見いたしました。その部屋仕えは奥方に話をしようと思ったのですが，部屋には入れず(582)，窓から二人を見たのです。領主のもとへ行って，事の次第を伝えました。領主はその話をきくと

これまでになくひどく悲しみ，家人の三人を呼び出して，すぐさまその部屋に行き，入口を蹴破らせ，中に騎士がいるのを認めました。怒りの余り領主は騎士を殺せと命じたのです。ギジュマルは立ち上がり，何も恐れません。敷布がいつも掛けてある樅の木の太い棒を両手に取って，その者たちを待ち受けました。その者たちが身近に迫るまえに，一人二人を痛い目に逢わせてやろうと思いました。領主はギジュマルを睨みつけ，お前は何者であるか，何処で生まれたか，どの様にしてここへ入り込んだのかと言って尋ねました。ギジュマルはどの様にしてここへ来たのか，奥方がどの様に自分を引き止めたのかを話し，傷ついた雌鹿の予言と舟と自分の傷とについて語り，今はすっかり元気になったと申しました。領主はそんなことは信じないが，お前の言う通りなら，その舟がみつかろう，海に送り返してやろう，と答えました。もしギジュマルが癒えるなら，それは困ったことであり，溺れ死ねば，有難いことだと思ったのです。領主はギシュマルにそう申し渡しますと，皆揃って舟つき場へ行きました。あの小舟を見付けて，ギジュマルを乗せました。ギジュマルはその舟に乗って故郷に向かいます。舟は走り続け，寸時も止まりませんでした。騎士は歎き，泣き，何度も奥方を失ったことを情けなく思い，全能の神に早く死を与え給え，二度と土を踏まさないで頂きたい，もし再び奥方に逢えるなら，命よりも大切にさせ給えと祈りました。始めてあの舟を見付けた港に着くまで，この苦しみが続きました。そこは自分の故郷にとても近い所です。ギジュマルはすぐさま舟から降りました。自分が昔，手許においていた一人の若者が，ある騎士に従って通ってゆきます。その若者は片手に馬を引いております。ギジュマルは若者が誰であるかわかりましたので，声をかけました。若者はふり向き，主人に気付き，馬を降り，ギジュマルに馬を贈りました。ギジュマルはその馬に乗って行きました。ギジュマルをみつけた友人たちは喜びました。ギジュマルは故郷でたいそうもてはやされましたが，いつも悲しく物思いにふけっておりました。国の者たちはギジュマルに妻を娶らせたいと思っていたのですが，ギジュマルはどの話にも耳を傾けません(646)。破らずに自分の下着を拡げられない様な女は，財産のためにせよ，恋のためにせよ，決して娶らないであろうと考えていたのです。この話はブルターニュ中に拡がりました。奥方といわず，おとめといわず，それをためしてみるためにギジュマルの所へ来なかったものはおりません。が，誰一人としてギジュマルの下着を拡げることはできませんでした。

ギジュマルがあの様に深く恋していた奥方について，皆様にお話しいたしましょう。領主は家人の一人の忠告に従って，奥方を灰色の大理石でできた塔の牢屋に入れてしまいました。奥方は昼間は苦しみ，夜は更に苦しみました。奥方がこの塔の中で味わったひどい苦痛と苦悩と苦悶と悲哀とは，この世の誰にも言い表わしえないでしょう。思いますに，奥方は二年以上もそこにいました。喜びも楽しみも奥方の耳には決して入りません。恋人のいないのを幾度も幾度も淋しく思いました。「ギジュマル様，貴方に御逢いしたのは何という不幸でございましょう。長い間こんな苦しみを味わうよりは，一そうひと思いに死んでしまいたいのです。恋しいお方，ここから逃げ出せるものなら，貴方が舟出をなさったあの場所で溺れ死んでしまいとうございます。」奥方はこう言って立ち上り，入口の所にやって来ますと，驚いたことに，鍵も錠もかかっておりません。あてどもなく外に出ました。誰にも押しとどめられませんでした。舟つき場にやって来ますと，あの舟がありました。その舟は奥方が身投げしようと思っていた岩に繋いであったのです。奥方は舟をみて乗り込みましたが，自分の恋するお方がここで溺れ死んだのだ，というただ一つのこと

だけが頭から離れません。そのため，立ったままでいることもできません。もし舷まで行ければ，海へ落ち込んだでしょう。奥方は非常に苦しみました。が，舟は走り始め，舟足早く奥方をつれ去り，堅牢で堅固な城の下にあるブルターニュの港に着きました。この城の持主はメリアデュと呼ばれています。この領主は隣人と争っておりましたので，朝早く起き，その敵を打つために家人を送り出そうとしていました。窓の側に立っていますと，舟のやって来るのが眼に止まりました。領主は石段を降りて，部屋仕えを呼びました。両人は急いで舟の所にゆき，梯子を伝って舟に上り，美しさにかけては妖精にも似た奥方を舟の中で見付けました。領主は奥方のマントをつかんで城へ連れてゆきました。領主は思わぬものをみつけて，上機嫌でした。奥方はこの上なく美しかったからです。誰によってこの舟に乗せられたにせよ，この奥方が大そう身分の高いお方であることは領主にもよくわかり(710)，熱い思いを寄せました。今までこんな法外な恋心を女に対して抱いたことはなかったのですが。領主の部屋には嫁ぐ前の妹がおり，とても美しうございました。領主は奥方をこの妹に委ね，充分にかしずかせ，敬まわせ，豪華な衣服をつけさせました。しかし，奥方はいつも思いに沈み，心の晴れる間もございませんでした。領主は何度も奥方のもとに行って話しかけました。心の底から奥方を恋していたに違いありません。領主は奥方を求めましたが，奥方はそれを風に柳と受け流し，あの帯を見せて，この金具をこわさずに帯をお解きになれない殿方には，決して恋をすることはございません，と申しました。領主はこれを聞くと腹を立ててこう答えました。「この国にはやはり，大そう評判の高い騎士がおります。その騎士は下着の右裾に結び目があることを口実にして，妻を娶るのを同様に拒んでおります。鋏か小刀を用いなければ，その結び目を解くことはできないのです。この結び目をお作りになったのは貴女だと思いますね。」奥方はこれを聞くと，大きな溜息をつき，今にも気を失いそうになりました。領主は奥方を両腕で抱きとどめ，奥方の肌着の紐を引きちぎり，その帯の止め金を開けようとしたのですが，そうはできませんでした。その後この国の騎士たちの中で，それを開けようと試みなかったものはおりませんでした。奥方はメリアデュが，相手どっていた隣人にいくさを挑む時まで，非常に長い間そこに逗留しました。メリアデュは騎士たちを呼び寄せ，傭い入れました。ギジュマルがきっと現われるだろうと思っていたのです。メリアデュはギジュマルに，報賞の返礼に，又，友人や同僚として，この火急の場に居合わせて，助力してくれるようにと求めました。ギジュマルは大そう豪盛な供揃いをつれてやって来ました。百人以上の騎士たちがつき従っておりました。メリアデュは彼を塔に泊めて，大へん手厚くもてなしました。メリアデュは奥方のもとに妹を差し向けました。そして二人の騎士を通じて，奥方には身なりを整えて出向いて来るようにことづけ，妹には自分がこれほどまで恋しているその奥方を連れて来るように命じました。妹はその言い付けを守りました。二人は立派に着飾り，手をとって広間にやって来ました。が，奥方は物思いに沈み蒼ざめていました。ギジュマルの名を聞くと立っていられなくなりました。妹に支えられなければ床に倒れてしまったことでしょう。騎士は立ち上って二人に近附き，奥方を見，その顔付と物腰とをしげしげと眺めました。そして少し後退りして，こう言いました。「この方は私の優しい恋するお方，私の望み，私の心，私の命，私を恋して下さった美しい奥方なのだろうか(774)，どこからお出でになったのか，誰に連れられていらっしゃったのか，これはまた何と狂おしい考であることか。この方が私の奥方でないのはよくわかっている。女というものは誰もよく似ている。取るに足らぬことで私の心は変る。だが，あの女に生き写しで，私の心に溜息

をつかせ，心を萎えさせるあの奥方のかわりに，私は喜んであの女に話しかけて見よう。」そこで騎士は前へ進み出て，その方の手に口づけをし，自分の側に坐らせました。しかし，その方に坐るようにと御願いしたこと以外には一言も話しませんでした。メリアデュは二人を眺め，その様子に心を痛め，笑いながらギジュマルを呼んでこう言いました。「ギジュマル殿，よろしければ貴殿の下着の結び目を解くように，私の妹に試させてはいかがなものでしょう。何か出来るかも知れません。」ギジュマルは「お許ししましょう。」と答え，その下着の番をする役目の部屋仕えを手許に呼んで，下着を持って来るよう命じました。妹は下着を受取りましたが，結び目は解けません。奥方はその結び目が自分の作ったものであることに気付き，心に大層な苦しみを覚えました。自分に力があり勇気があれば，進んでためしてみるのだが，と考えたからです。メリアデュはそれに気付き，この上なく悲しんで言いました。「奥方よ，結び目が解けるかどうか，ためして御覧なさい。」奥方はその言葉を聞くと，下着の裾を手に取り，その結び目をやすやすと解きました。騎士は驚きました。この方が自分の奥方であるのはよくわかりましたが，確かにそうだとは信じられなかったのです。そこでこんな風に話しかけました。「奥方様，優しいお方よ，ほんとうに貴女でいらっしゃいますか，まことを私に言って下さい。貴女の体と締めて差し上げたあの帯とを見せて下さい。」ギジュマルは奥方の両脇に手を当てて帯のあるのをたしかめますと，こう言いました。「美しいお方よ，ここで御目にかかれるとは何と運の良いことでしょう。どなたに連れられてここにいらっしゃったのですか。」奥方はいままでいた牢屋がどんなに苦しく辛く悲しかったか，どの様な事が起ったのか，どうやって牢屋から逃げ出し，身投げをしようと思い，あの舟を見つけ，それに乗り込み，この港に着き，あそこにいらっしゃる騎士に引き留められて大そう手厚くもてなされたが，その騎士から絶えず愛を求められた，しかし，喜びは，今再び立ち戻った，といういきさつを話しました。そして「恋するお方，どうか貴方の愛人を連れて行って下さいませ。」と言いました。ギジュマルは立ち上ってこう言ったのです。「領主殿，御聞き下さい(838)。この方は死んだと思っていた私の恋する御方であることがわかりました。メリアデュ殿に懇願いたしますが，どうか，この方を私に御返し下さい。私は貴殿の家臣になり，百人あるいはそれ以上の騎士と共に，二年でも三年でもお仕えいたしましょう。」その時メリアデュは答えました。「美しい友，ギジュマル殿，貴殿がそのようなことを私に求められたとしても，驚きも悲しみも全く私はしませんぞ。この奥方をみつけたのは私でありますから，手放したくはないのです。貴殿と争っても，きっと守ってみせましょう。」

ギジュマルはこれを聞くと，家人たちに急いで馬に乗るよう命じ，その場を立ち去って，メリアデュに戦を挑みました。ギジュマルにとっては，恋人を残してきたのが大そう辛うございました。ギジュマルがつれて来てこの町にいた騎士の中で，たたかいに赴かなかったものは誰もいませんでした。どの騎士もギジュマルに忠誠を誓っておりました。その者たちはギジュマルの行く所ならどこへでもついて行くつもりでありましたので，この場に及んで誓いを破れば，赤恥をかくことになります。その夜同勢はメリアデュと戦っている相手の城に着きました。城主は人々を泊め，ギジュマルとその援軍をみて大へん喜び，戦は終ったと合点しました。翌朝彼らは起き上ると，館で身仕度を整え，町から鳴物入りで出陣しました。ギジュマルは始めて一軍の指揮をしたのです。総勢はメリアデュの城にやってきて，攻撃をし掛けましたが，城は大そう堅固で陥落させるのには失敗しました。ギジュマルは町を遠巻きにして，町を奪わないうちは一歩も退かぬという風を見せま

した。ギジュマルの味方と部下の数が増える一方でありましたので，城内の者たちはことごとく飢えました。ギジュマルはその城を陥れ，砦の中にいた城主を殺し，恋人を連れ出しました。その喜びは天にも上るほどで，その苦しみは今や，影も形もなく消え去ってしまいました。

今，御聞きになったこの話から，ギジュマルの譚詩が作られております。人はそれを竪琴や提琴にあわせて歌うのです。その調べは耳に心地よくひびくのでございます(886)。

あ と が き

British Museum, MS. Harley 978 は Marie de France の 12 篇の Lais を含む唯一の写本であり，すべての刊本の底本とされてきた。ここに写真版として紹介し，邦訳を副えた。邦訳に際しては写本に最も忠実な刊本と考えられる，MARIE DE FRANCE, LAIS, edited by A. Ewert, 1969[8], Oxford, Blackwell [Blackwell's French Texts] を主に参照した。なお1972年度大阪大学文学部において開講されていた ≪Marie de France≫ に関する大高順雄博士の講義を聴講させて頂いたのは，英文科出身の筆者がこの一論を作成するための貴重な拠り所となったことを記して深く謝意を表し，聴講院生その他の方々による試訳に稗益されたところのあることをつけ加えておく。

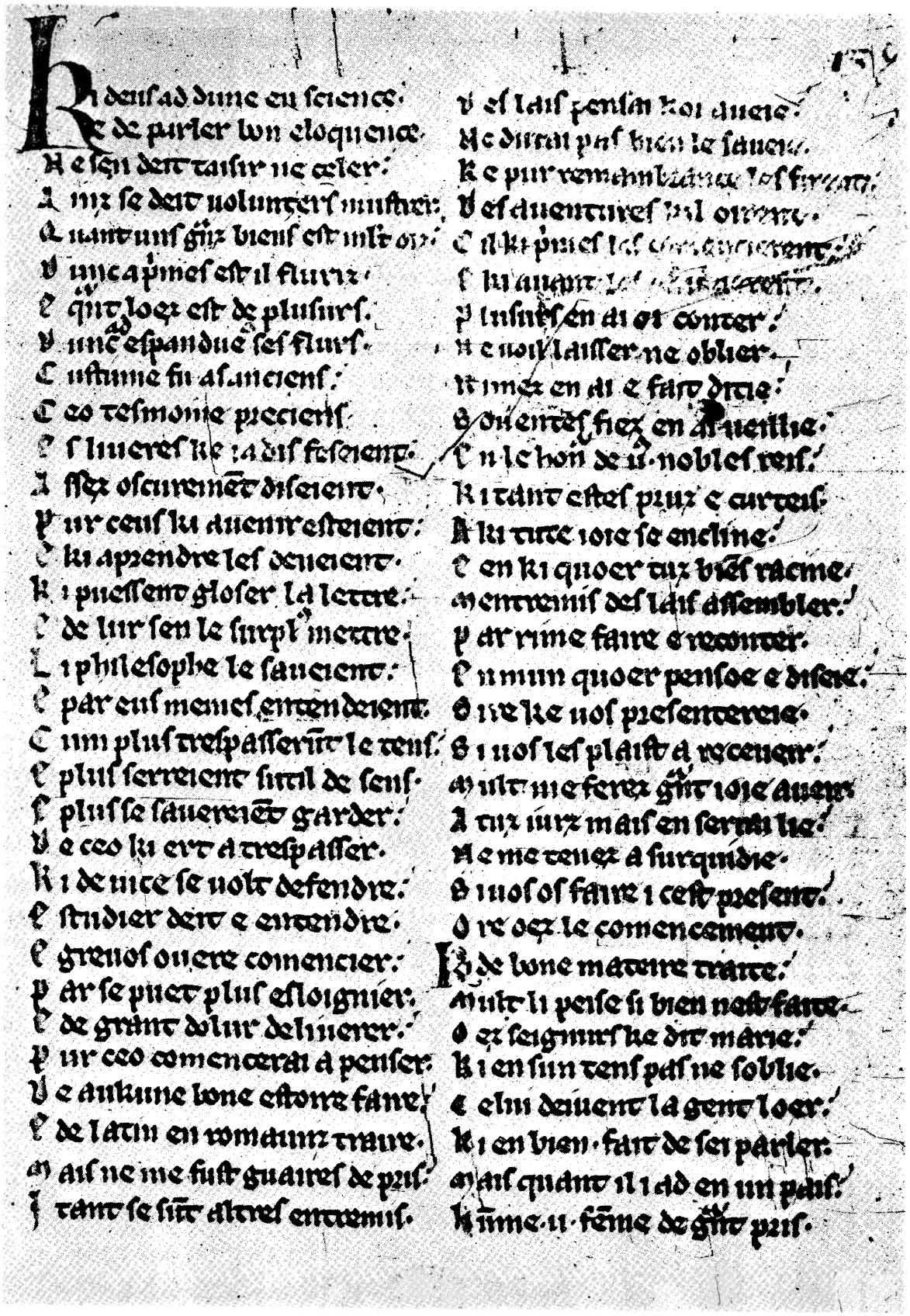
MARIE DE FRANCE

LAIS

≪Prologue≫ and ≪Guigemar≫

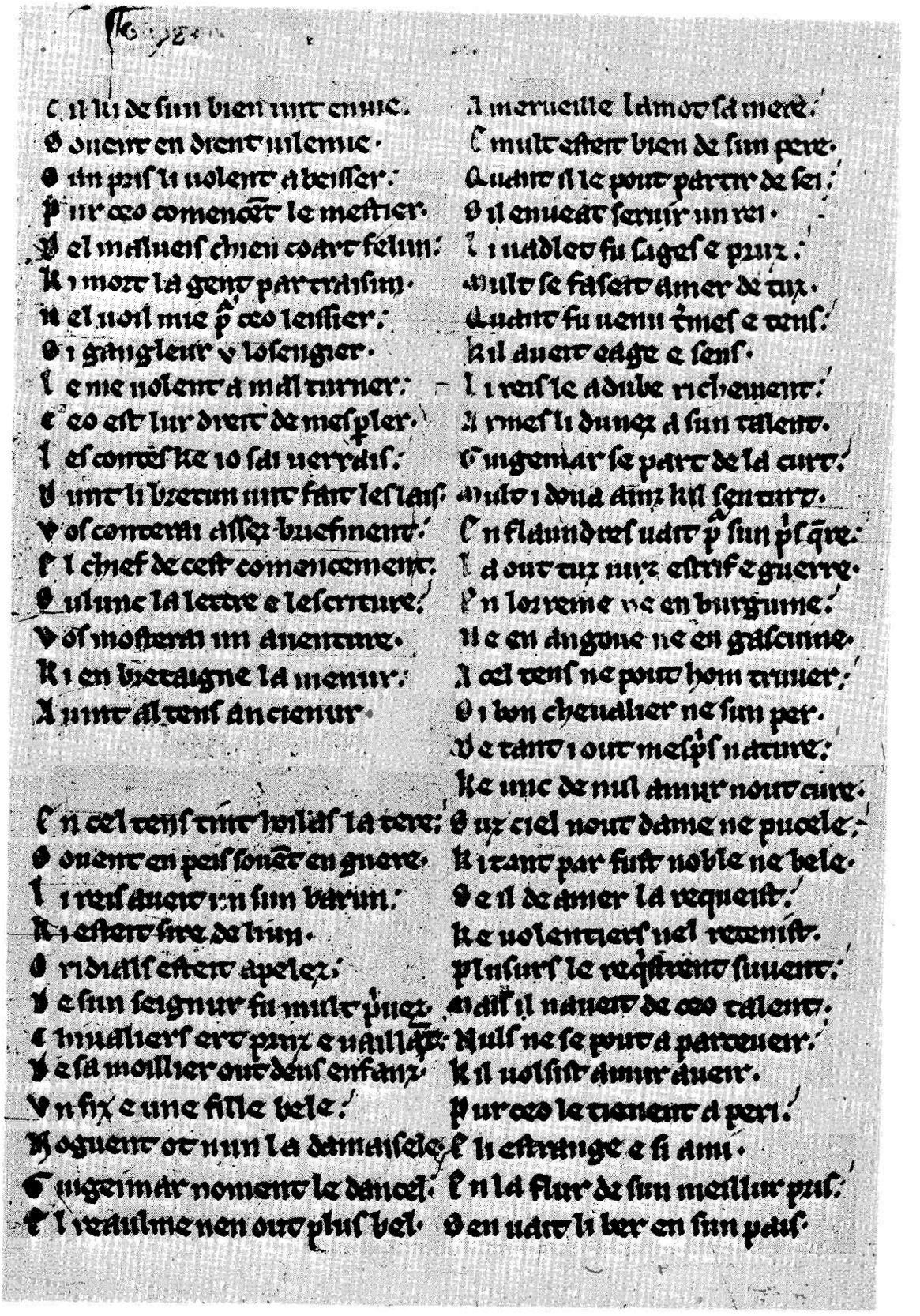
British Museum, MS. Harley 978

ff. 139[a]—146[b]



a（Prologue 1—32）　　b（Prologue 33—56 ——Guigemar 1—8）

139 r.



Cil li de sun bien unt enuie.
Ouent en dient ulemie.
Un pris li uolent a deisser.
Pur ceo comencet le mestier.
Del meluais chien coart felun.
Ki mort la gent par traisun.
Nel uoil mie p ceo laissier.
Ki gangleur e losengier.
Ne me uolent a mal turner.
Ceo est lur dreit de mespler.
Les contes ke io sai uerrais.
Unt li bretun unt fait les lais.
Vos conterai assez buefment.
Le chief de cest comencement.
Si uolume la lettre e lescriture.
Vos mosterai im aneiture.
Ki en bretaigne la menur.
Aunt al tens ancienur.

Mi merueille la mort sa mere.
Cumult esteit bien de sun pere.
Quant il le pout partir de sei.
Si il enueat seruir un rei.
Li uadlet fu sages e pruz.
Mult se faseit amer de tuz.
Quant fu uenu tres e tens.
Ki il aueit eage e sens.
Li reis le adube richement.
Armes li dunez a sun talent.
Guigemar se part de la curt.
Mult i doua ami kil seruirent.
En flandres uint p sun pelerine.
Ki ot tuz iurs estrif e guerre.
En lorreine ne en burgume.
Ne en angoue ne en gascume.
A cel tens ne pout hom trouer.
Un bon chevalier ne sun per.
Ne tanto i out mespris nature.
Ke unc de nul amur nout cure.
Ne uz ciel nout dame ne pucele.
Ki tant par fust noble ne bele.
Ne il de amer la requeist.
Ke uolentiers nel retenist.
Plusurs le requerent souuent.
Mais il nauert de ceo talent.
Nuls ne se pout a parteuer.
Ki il uolsist amur auer.
Pur ceo le tienent a peri.
Li estrange e li ami.
En la flur de sun meillur pris.
Si en uint li ber en sun pais.

En cel tens tint lyonis la tere.
Ouent en peis sonet en guere.
Li reis aueit un sun barun.
Ki esteit sire de lyun.
Oridialis esteit apelez.
Ne sun seignur fu mult prez.
Chualiers ert pruz e uaillant.
Ne sa moillier out deus enfanz.
Un fiz e une fille bele.
Hoguent ot nun la damusele.
Guigemar noment le dancel.
Li reaulme nen out plus bel.

a (Guigemar 9—38)

b (Guigemar 39—70)

139 v.

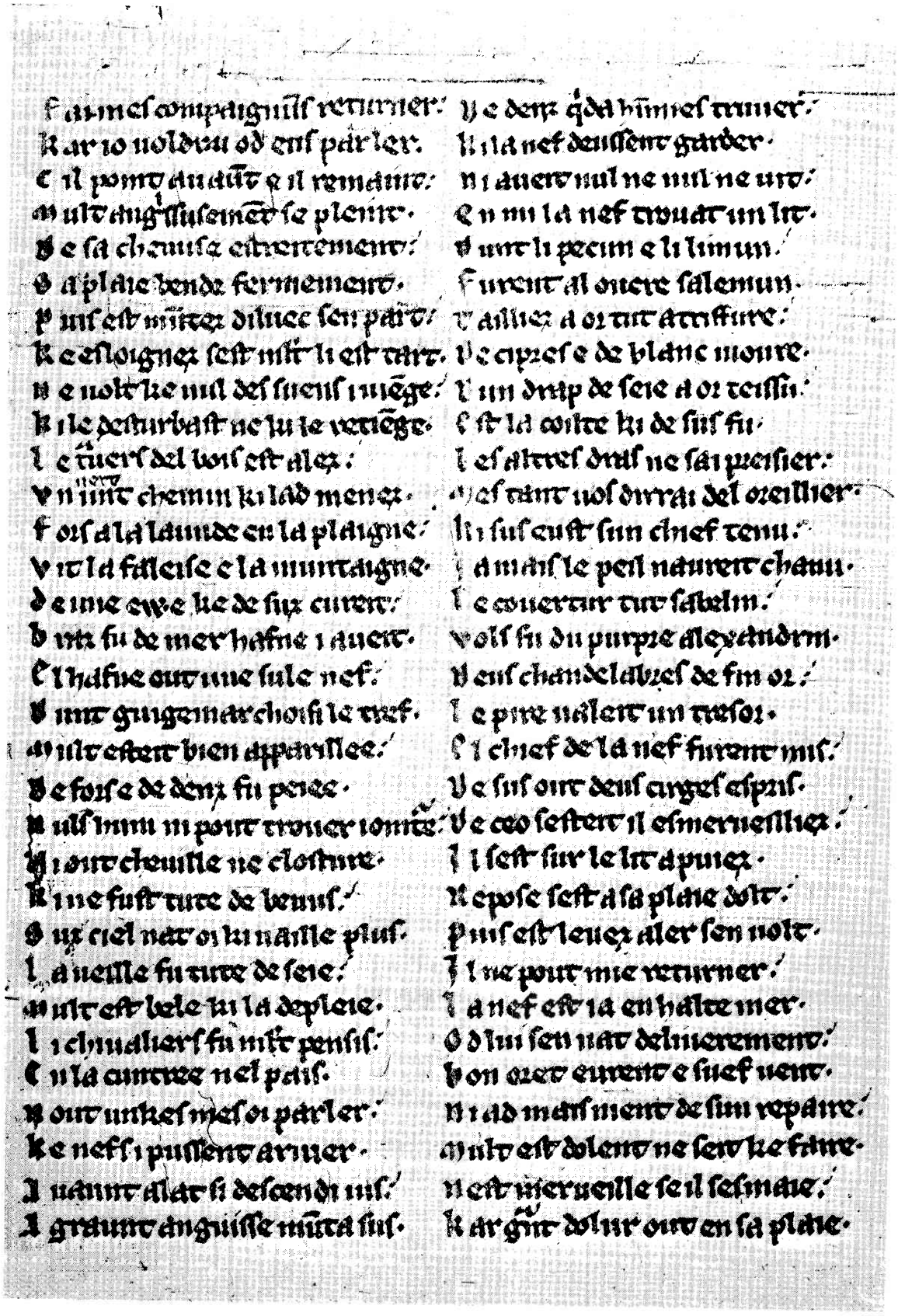
Veer sun pere e sun seignur:
E a lune mere e sa sour.
Li mult lancient desire:
Ensemble od eus od sunurne.
Ceo mest auis un meis entier:
Tant li pust daler chacier.
La nuit somiet ses cheualiers:
O as uenerie e ses lerriers.
E al matin uint en la forest:
Par cel deduit formet li plest.
A un grant cerf sure a ruie:
Li chien furent desciple.
Li uenerie curent deuant:
Li damaisel se uint tarjant.
O un arc li porte un uallet:
O un ansac e sun berseret.
Tranc nolent si mes enist:
Ainz ke diuec se remenist.
En lespesse dun grant buisson:
Vit une bise od un foun.
Une fu blanche cele leste:
Pi erchel de cerf ont en la teste.
Ne le bai del brachet saili:
Li rent sun arc si traist a li.
En lesclot la feri deuant:
Le chai dementen auant.
La secte resorti ariere:
Guigemar fiert en tel maniere.
En la quisse desire al cheual:
Ke tut lestuet descendre aual.
A riere chiet sur lerbe drue:
Vi elez la bise ke ont ferue.

La bise ke nafree esteit:
Angisuse esteit si se plaineit.
Apres parla en itel guise:
Oi lase io sui ocise.
Tu uaisal ki mas nafree:
Tel seit la tue destinee.
Ja mais nenes tu medecine:
Ne par herbe ne par mecine.
Ne par mire ne par pecun:
Hanras tu iames garisun.
Vela plaie ke as en la quisse:
Vesure cele te guarisse.
Ki suffert pur tue amur:
Si grant peine e tel dolur.
Ne unkes feme taisir ne suffri:
Tu refuis tant pur li.
Vint cil ses merueilleiunt:
Li ament e ame aiderunt.
Ki pois amerunt apres:
Va ten de ci lais maner pes.
Guigemar fu formeut blesee:
Ne ceo kil ont est esmaiez.
Comencat sei a purpenser:
En quele terre puisse aler:
Pur sa plaie faire guerir:
Car ne se uolt laisier murir.
Il ser assez e bien le dit:
Ke unkes feme nule ne mit.
A ki il turnast sanur:
Ne ki le guarehist de dolur.
O un uallet apelat auant:
A mis faire il ira tost poignant.

a (Guigemar 71—102)

b (Guigemar 103—134)

140 r.



Faimes compaignuis retourner.
Kar io voldrai od eus parler.
E il pomt ai aiut e il remaindre.
Multangoissusement se pleint.
De sa chausse estreitement.
O a plaie bende fermement.
Puis est mis ter dilec sen pas.
Ke esloignez sest mis li est tant.
Ne volt lue nul des sueus i mege.
Ki le deturbast ne lui le vetege.
Le tuers del bois est alez.
Vn iuint chemin ki lad menez.
Fors ala launde en la plaigne.
Vit la faleise e la mountaigne.
De une ewe lue de sis curent.
Dunt fu de mer hafne i auent.
Cil hafne ont une sule nef.
Dunt gugemar choisi le tref.
Multestoient bien apparillee.
De fouse de deus fu perce.
Nuls hom ni pout trouer iouste.
Ni ont cheuille ne clostume.
Ne fust ture de beuus.
Ne ciel nat oi ki naille plus.
La neille fu ture de seie.
Multest bele lui la depleie.
Li chualiers fu mis pensis.
En la cuntree nel pais.
Ne ont unkes mes oi parler.
Ke nefs i pussent arriuer.
Ne nauent alar si descendi mis.
Ne graunt angoisse mista sus.

De deus qui hommes trouer.
Ki la nef deussent garder.
Ni auent nul ne nul ne uit.
En mi la nef trouat un lit.
Dunt li pecim e li limun.
Furent al oiere salemun.
Tailliez a oi tut atriffure.
De cipres e de blanc moure.
Vn drap de seie a oi teissu.
Est la coilte ki de sus fu.
Les altres draus ne sai preisier.
Mes tant vos dirrai del oreillier.
Ki sus eust sun chef tenu.
A mains le peil nauent chaun.
De couertur tut sabelin.
Vols fu du purpre alexandrin.
Deus chandelabres de fin oi.
De pire valent un tresoi.
Li chief de la nef furent mis.
De sus ont deus angres espris.
De ceo sestent il esmerueillez.
Il sest sur le lit apuiez.
Repose sest a sa plaie dolt.
Puis est leuez aler sen volt.
Il ne pout mie returner.
La nef est ia en halte mer.
O dui sen nat deliuerement.
Pon oiet curent e suef uent.
Ni ad mais nient de sun repaire.
Multest dolent ne sei lue faire.
Ne est merueille se il sesmaie.
Kar grant dolur ont en sa plaie.

a (Guigemar 135—166)　　b (Guigemar 167—198)

140 v.

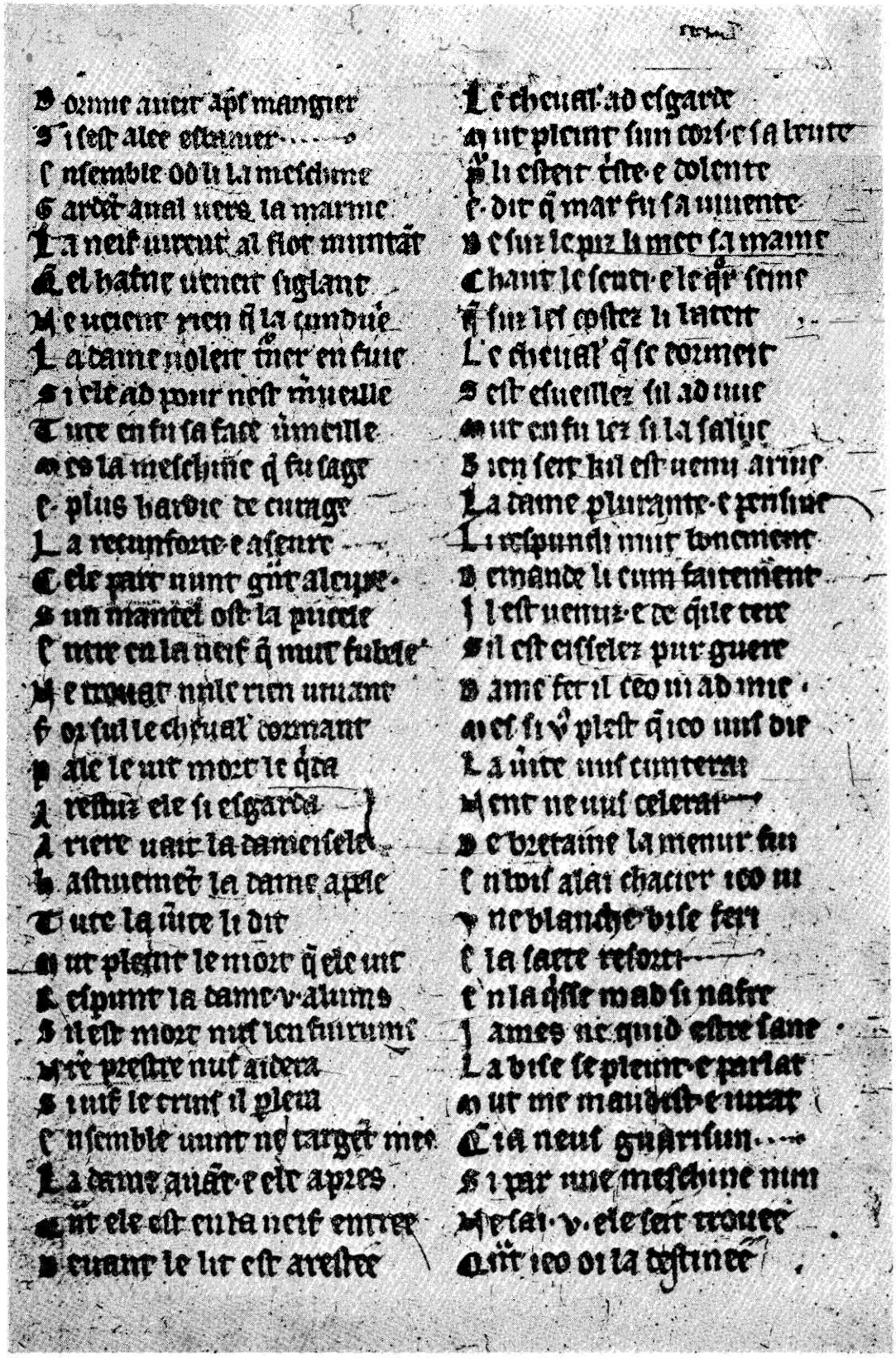
Vnfrir li estut lauenture.
A deu prie li en prenge cure.
Ki a sun poeir la meut apoie:
Ki si le defende de la mort.
Ki li se colcha si sen dort.
Vn ad trespasse le plus fort.
Ainz le uespre armeiez.
A ou si guarisun aurez.
De sun une aiture eire.
Ki esteit cheef de cel regne.
Li sires li la mantenent.
Mult fu uelz hume e feine auent.
Vne dame de haut parage.
Franche curtoise bele e sage.
Gelus esteit a desmesure.
Ki ceo apoiroit sa nature.
Ke tut li ueil seient gelus.
Mult haet chascun ke il seiuous.
Tels de cage le trespas.
Si nel la guardent une agas.
Vn uuuergier sur le donguin.
Ia out un clos tut enuiron.
De uert marbre fu li muralz.
Mult par esteit espes e halz.
Ni out fors une sule entree.
Cele fu nort e mur guardee.
De altre part fu clos de mer.
Nuls ne peut eissir ne entrer.
Ki ceo ne fust od un batel.
De busun eust al chastel.
Li sire out faut de denz le mur.
Pur mettre i sa feine a seur.

Chaumbre sur ciel nort pl bele.
Al entree fu la chapele.
La chaumbre ert peinte tut entur.
Venus de deuesse damur.
Fu tres bien en la peinture.
Les traiz mustrez e la nature.
Comment hom deit amur tenir.
Cumment leom deit amur tenir.
Cu lealment e bien seruir.
Le liure ouide ou il enseme.
Comet chascun sauuir estreme.
En un fu ardant les getout.
Ceuz i ceus escumengout.
Ki a mains cel liure lireient.
Ne sun enseignement nen ferent.
La fu la dame enclose e mise.
Vne pucele a sun seruise.
Li auiez sis sires bailliez.
Ki mult ert franche e enseignez.
De sa niece fille sa soeur.
Entre les deus ouu grant amur.
Od li esteit qui il ert.
Ne cil la lui repairoit.
Hume ne feme ni uenist.
Ne fors de cel mustiel ne issist.
Vns uuelz prestres blancs e floux.
Guardoit la clef de cel portz.
Les plus vas membres out pour.
Autrement ne fust il pas creiez.
Le seruise deu li disoit.
La sun mangier la seruoit.
Cel iur meisme amz veiauge.
Fu la dame el uuergier alee.

a (Guigemar 199—230)

b (Guigemar 231—262)

141 r.



a (Guigemar 263—294)　　b (Guigemar 295—326)

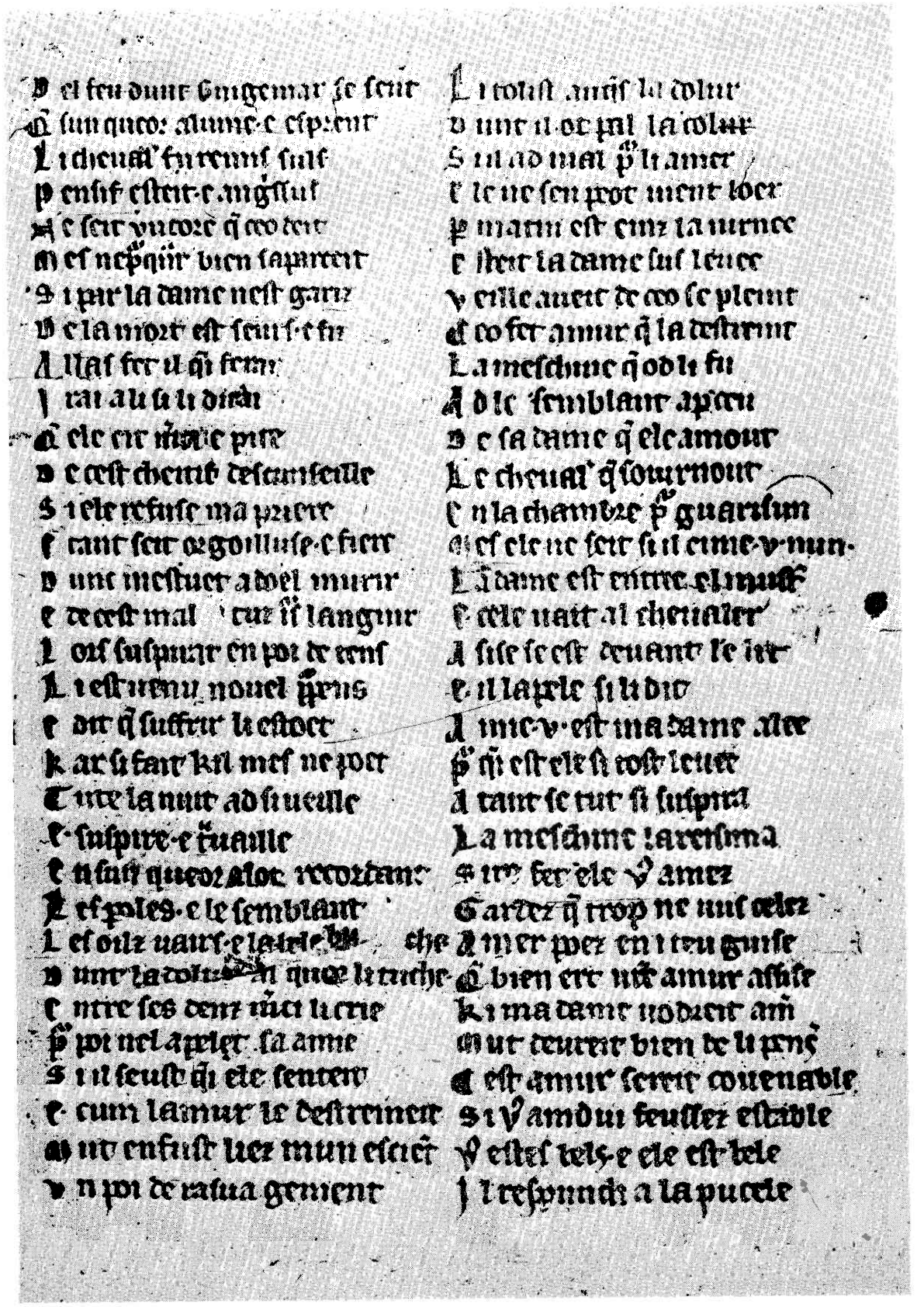
141 v.

Ensinemenr del bois issi
E un hafne cest nef mis
Dedens entrai si fis folie
Od mei sen est la neif mise
Ne sai ur ico sui arrise
Conuint ad nun cestr estre
Ele dame p deu mis pri
Conseiller mei nostre mesnie
Ki ico ne sai qil pur aler
Ele la neif ne puis gouuerner
Le li respunt tel sur chiere
Conseil v dirrai volentiere
Cestr estre est mun seignur
La cunte sur entur
Ki ides hum est de haut parage
Et mur pest de gur sage
Ingrui sunemenr est gelus
Par cele fei ki ico dei vus
Dedens cest clos mad enserre
Ilad fors une sule entree
Un mes pstre la porte garde
Ico dorms deus q mal ne lui tarde
Et sur mur e sur enclose
La nule riez ne ceir si ose
Ico en ise sul nel comande
Si mis sures ne me demande
Ilai une chambre e une chaire
Ensemble od mei cestr pucele
Si v plest a demurer
Tant q puisez errer
Volentiers mis sourmerum
Se de quecor v seruirum

Qur ilad la pole oit
Ne nemer la dame mete
Od li sumurnerur ceo dit
Ne estaur cest dreite el lit
Celes li aiemt apreme
La dame en sa chambre le meine
De sur le lit ala meschine
Ilert un tossal q p coisme
En la chambre aparailler
La est le damerseli cuchier
Ia cuns de or aporterent
Sa plaie e sa quisse lauerent
De un tel drap de cheisul blanc
Li osterent entur le sanc
P lune estreiterunent tende
Une le menerent en gur chiere
Qur lur mangr al uespre uient
La pucele tant entretient
Dunt li chiz out asez
Ien est peu e altrunez
Ai esamur lor ferui al uis
La ert sis qis en gur estis
Kar la dame lad si nacie
Tut ad sun pais oblie
De sa plaie nul mal ne sit
Mais suspira angoisseuse
La meschine kil dert sur
Pur ce q le laist dormir
Cele sen parr sil ad laissie
Puis killi ad dune cunge
Ensur sa dame en est alee
Ankes esteir reschaufee

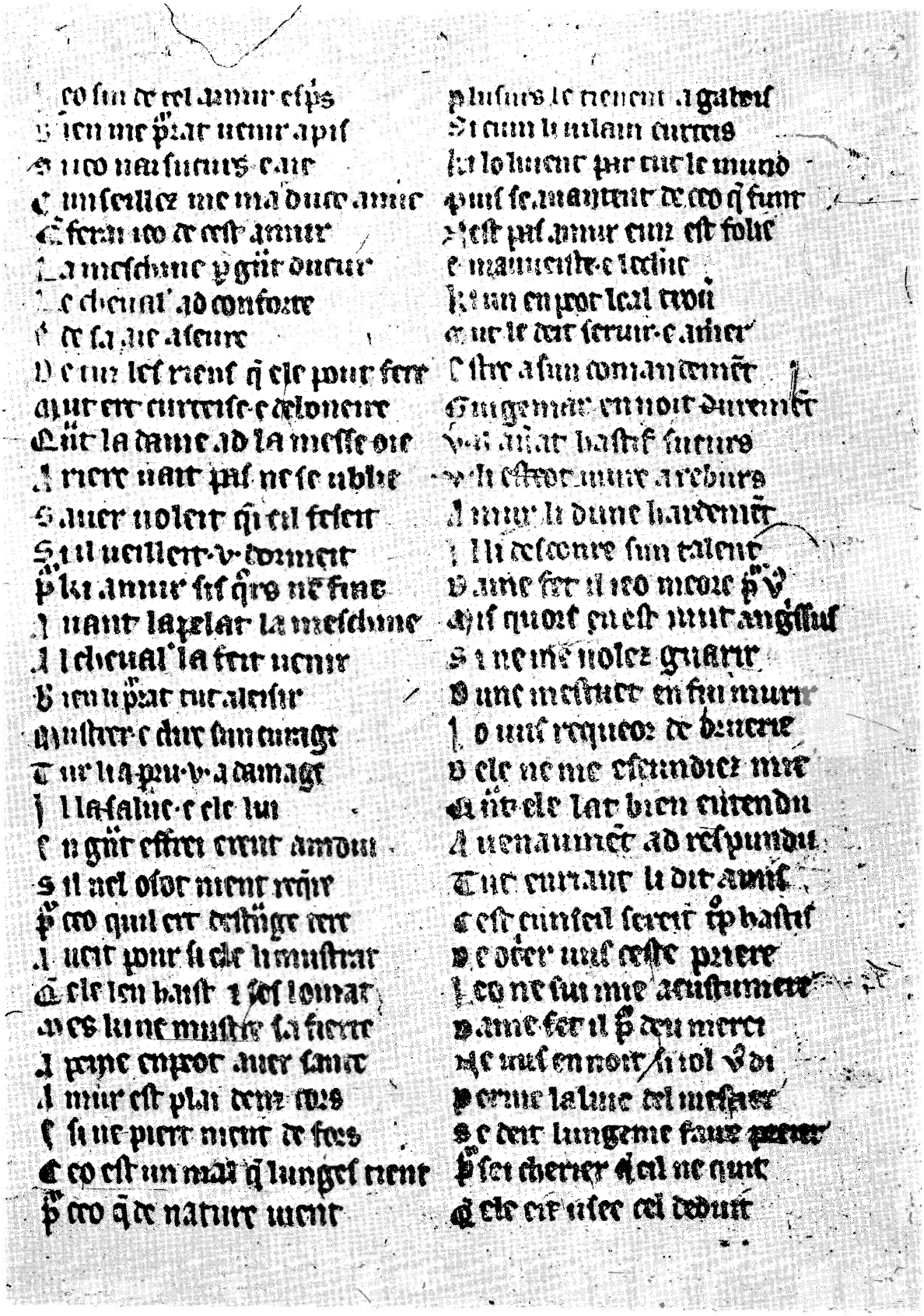
a（Guigemar 327—358）　　b（Guigemar 359—390）

142 r.



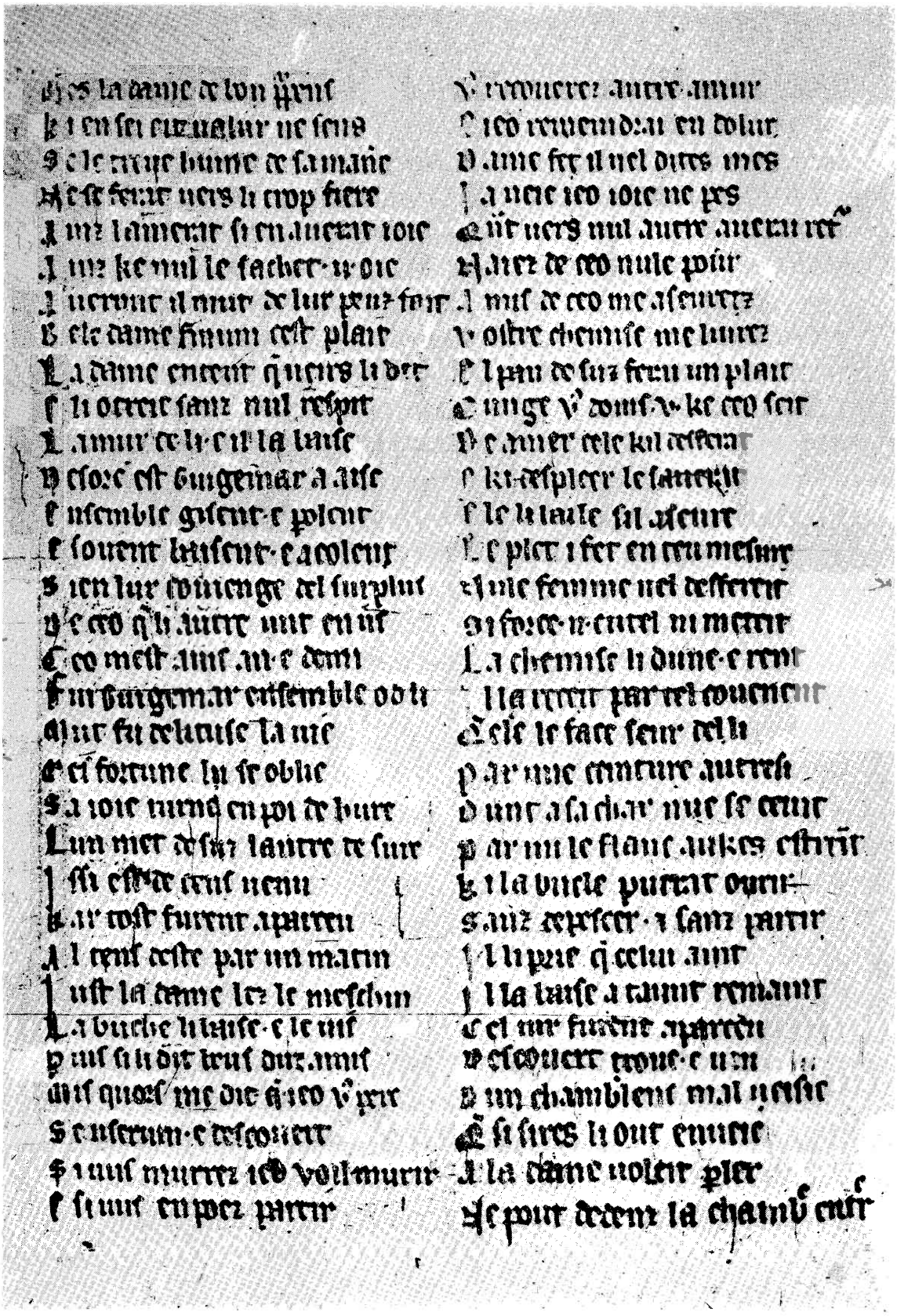
a（Guigemar 391—422）　　b（Guigemar 423—454）

142 v.



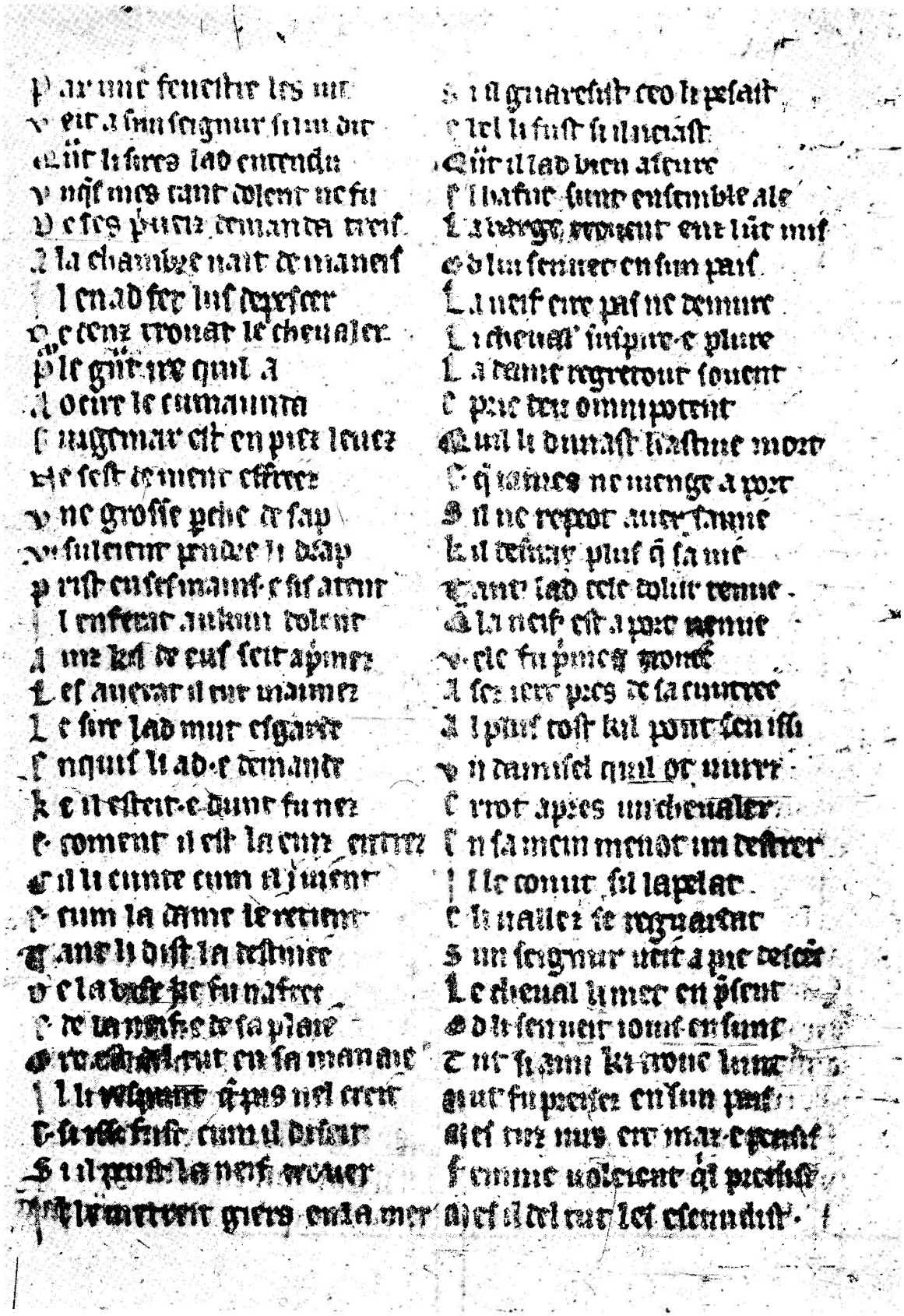
a（Guigemar 155—186）　　b（Guigemar 187—518）

113 r.



a（Guigemar 519—550）　　b（Guigemar 551—582）

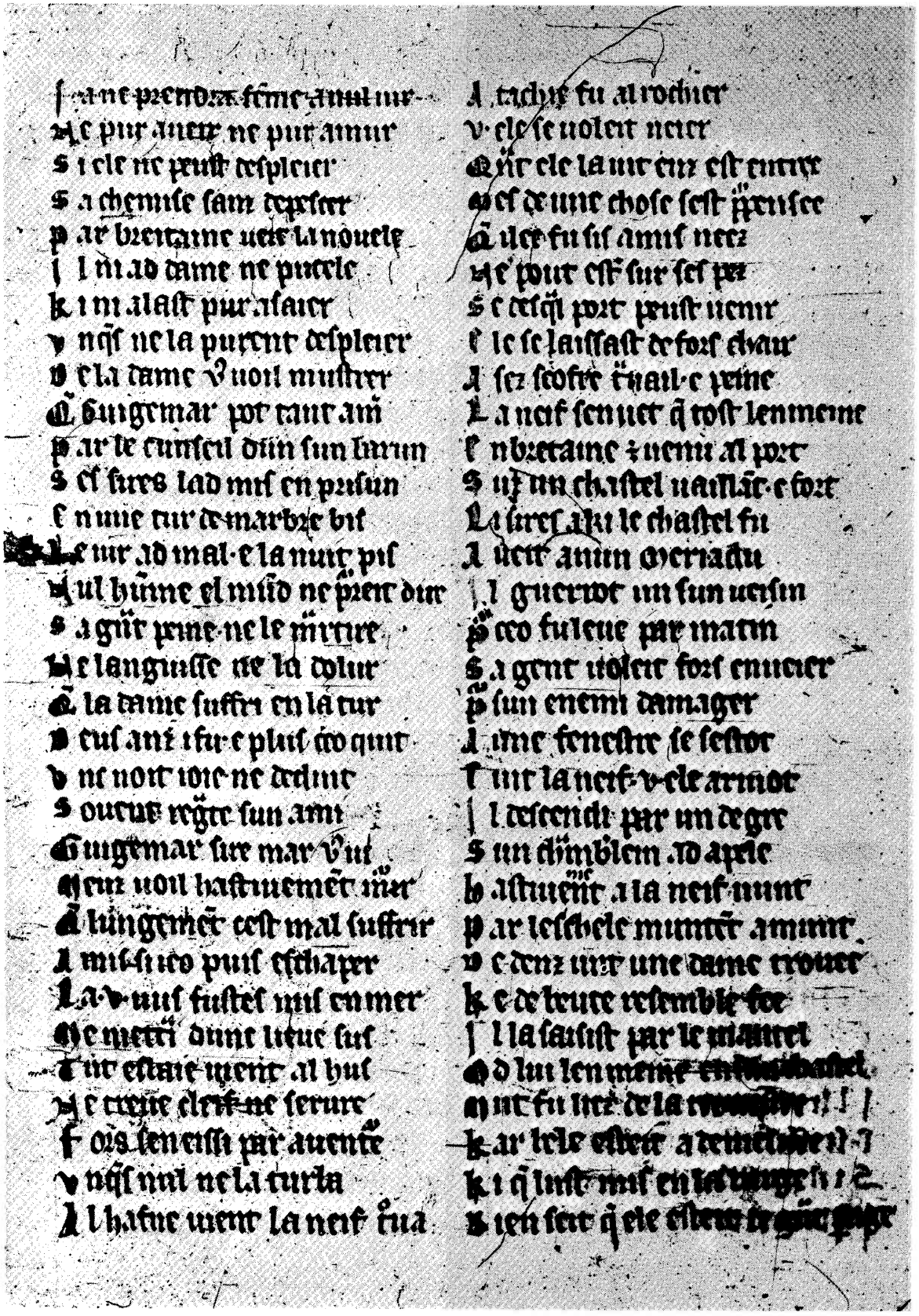
143 v.



a (Guigemar 583–613)

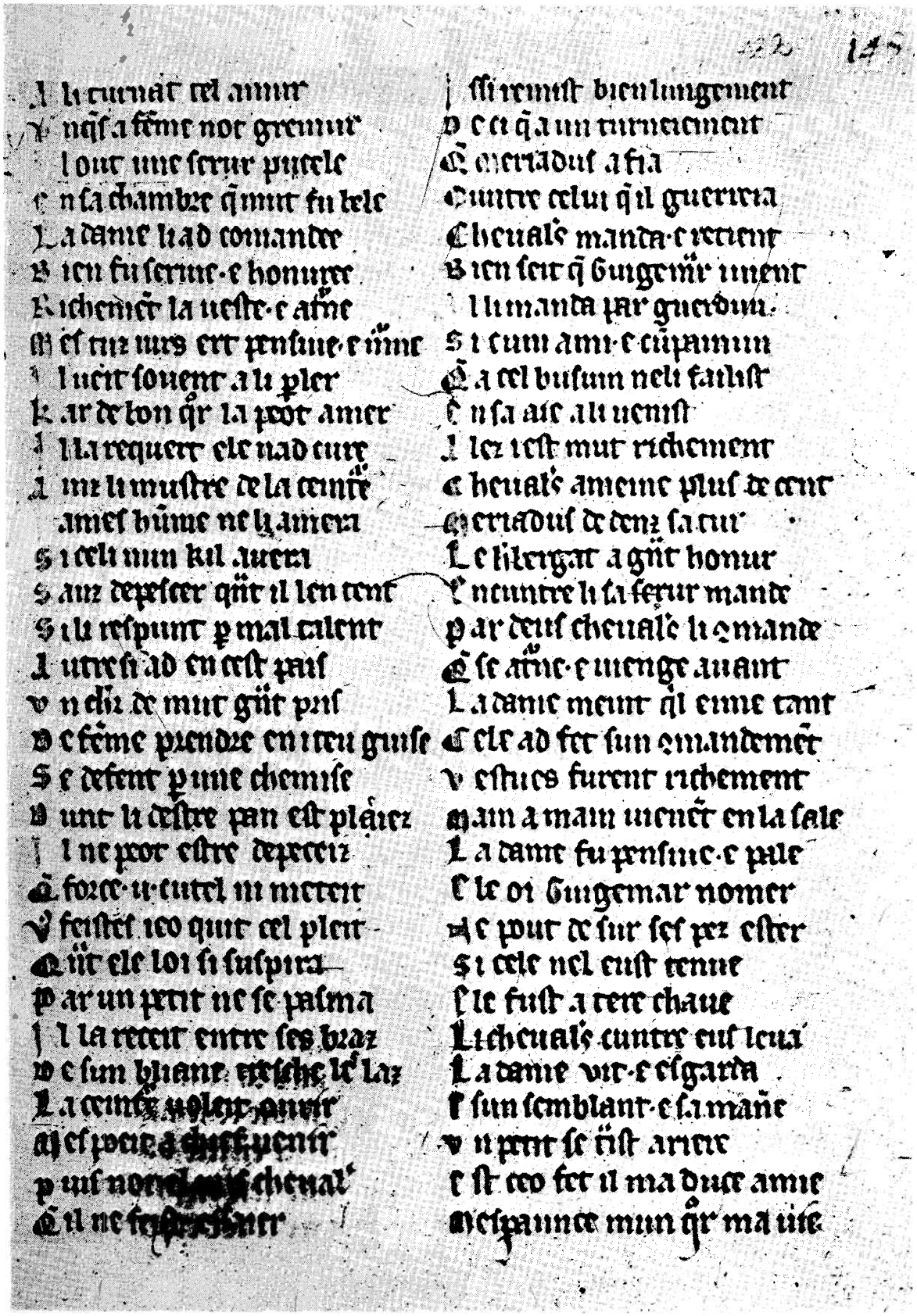
b (Guigemar 614—616)

111 r.



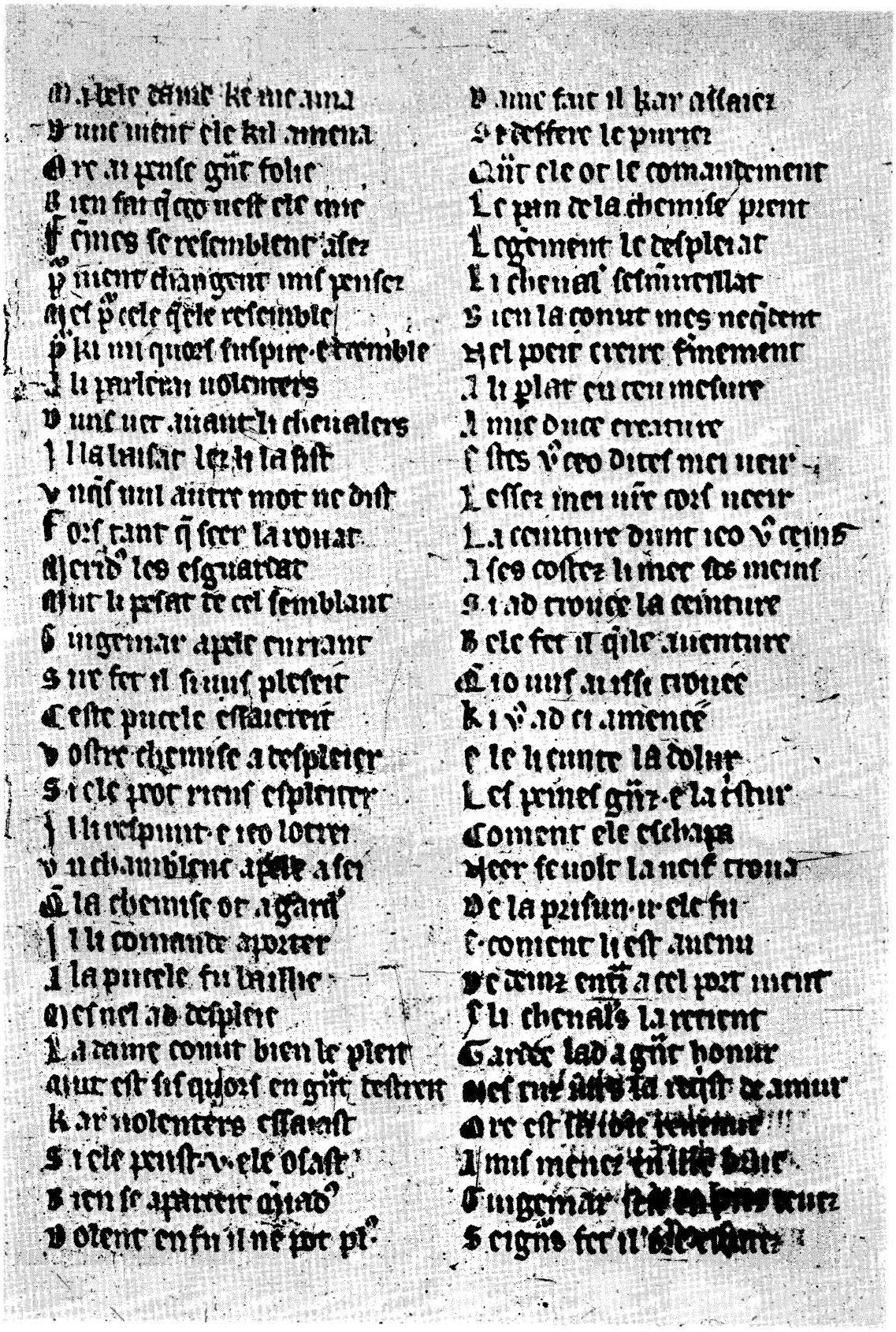
a (Guigemar 647—678)　　b (Guigemar 679—710)

144 v.



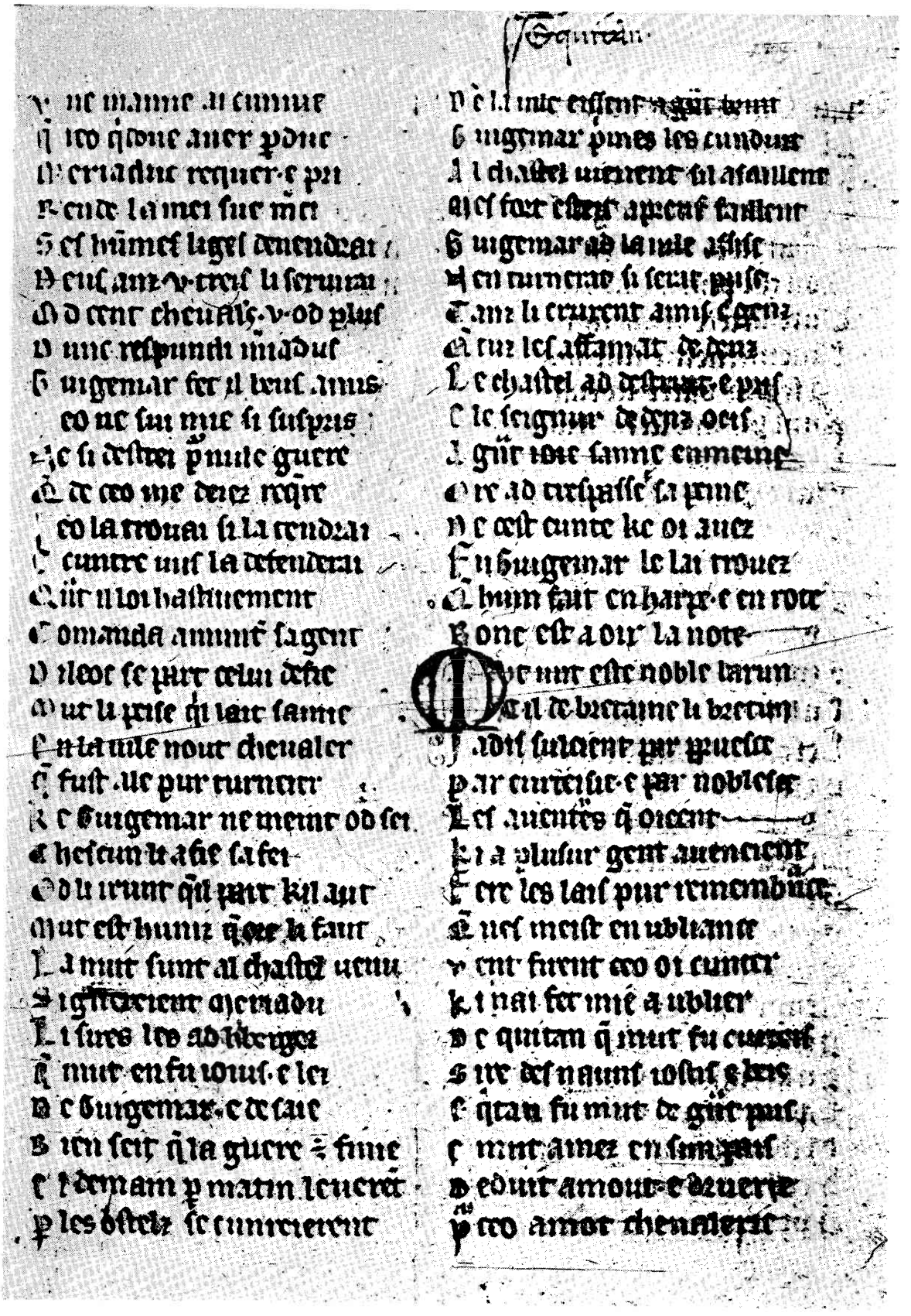
a (Guigemar 711—742)　　b (Guigemar 743—774)

145 r.



a（Guigemar 775—806）　　b（Guigemar 807—838）

145 v.



a (Gigeumar 839—870)　　b (Guigemar 871—886—Equitan 1—16)

146 r.